

一、アウフヘーベンの舞台芸術

二〇〇一年、狂言は能とともにユネスコの世界無形文化遺産候補にリストアップされ、正式登録が確定した。そのことに象徴されるように、世界的水準において狂言が高い文化的価値を有することは、もはや広く一般の常識であると言えよう。その一般的評価はおそらく、長い伝承の中で育まれ保持されてきた伝統的価値という側面の認識が強かろうと思われる。

そういう評価の場合、多くは、すでに完成し固定された芸能をそのまま伝承していると思われるにちがいない。ところが実は、現時点においても狂言は進化し続けているのであり、洗練のプロセスが進行していると言つて過言ではない。

たとえば、「木六駄」〔万作十八選の章参照〕という曲目一つ取ってみても、それは歴然である。名人と称された六世野村万蔵とその子息の野村万作の演技をビデオ映像（注1）で見比べるとき、あきらかに後者のほうが細やかに工夫された演技になっている。飲んで空になった酒樽を振るときの動きが、前者は無造作、後者は計算された演技になっていることは、その典型事例である。

具体的に説明しよう。空になった酒樽を、太郎冠者は二回振る。六世万蔵は二回とも軽そうに振ってみせる。ところが、万作は、一回目は「まさか」という感じでおずおずと振り、二回

目は「ええつ、もうこんなにー」という感じが出るように、いかにも軽そうに振るのである。そして、そのような工夫は、十二頭の牛を追いながら登場するときの揚幕(注2)を下ろすタイミングなど、随所に見られる。

しかし、ここで私は、そういう伝承的側面の洗練度のみに価値を見出そうというのではない。それと無関係ではないが、他の芸能・演劇には見られない独特の普遍的な価値があることを指摘したのである。

それは、一口で言うなら、「喜劇と伝統演劇」および「写実と様式」という、それぞれ相反する概念の、二つの「アウフヘーベン」によって成り立っているということである。

アウフヘーベンとは、ドイツ語で「高める」という意味である。それを哲学者ヘーゲルが論理学の弁証法の用語として用いた。ヘーゲルによれば、低い段階の概念は否定されることによって高い概念へと進展するが、その場合、高い段階の概念に低い段階の実質が保存されるという。それをアウフヘーベンと称し、日本語では「止揚」または「揚棄」と訳される。

あるいは、「定立(テーゼ)に対する反定立(アンチテーゼ)を総合(ジンテーゼ)して構成される論理」と説明されることもあり、ヘーゲル学者は「対立物の統一がヘーゲル弁証法を貫くテーマ」だと説く(注3)。

私がかここで用いるアウフヘーベンは、「低いレベルで対立する二つの概念を総合して、高いレベルの概念へ進化させること」という意味である。つまり、通常は対立矛盾するはずの「喜劇と伝統演劇」もしくは「写実と様式」という概念が、狂言において矛盾なく両立しており、それによって狂言の価値が高められているということを説いてみたい。

二、喜劇と伝統演劇のアウフヘーベン

狂言は、中世すなわち室町時代の喜劇であるとするのが一般的定義であり、笑いを主眼とするものであるという認識も世阿弥以来の常識である(注4)。

もちろん、祝言のめでたさをテーマにした脇狂言(注5)などは単純に喜劇とは言えないものだし、むしろ悲劇的結末とも言える「川上」(野村万作の狂言人生および万作十八選の章参照)のような狂言もある。川上地蔵の御利益(ごりやく)でせっかく開眼した盲目の男が、妻の剣幕に押されて、「離縁せよ」とのお告げを守れなかったために、また失明するという悲しい展開。

そのようなものをすべて包含すれば和楽(なごやかな楽しさ)の世界と規定するのがふさわしいと説かれることもある(注6)。

また、西洋のドラマツルギー(作劇法)的概念でとらえるなら、複雑な「喜劇」ではなく単純な「笑劇」だと主張する論もある(注7)。たとえば、「じゃじゃ馬ならし」のようなシェイ